

『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会： 売買春・恋愛の近現代史』

寺澤優*著、有志舎、2022年

眞 杉 侑 里†

本書は、大正から昭和戦前期にかけての日本における売春営業——特に私娼をめぐる状況を追い、1930年代にある種の転換点を見出すものである。ここでいう私娼とは、芸妓・銘酒屋の酌婦・カフェーの女給を指す。これらはいずれも、明治初期から国家の管理下にあつて売春営業を行った遊廓および娼妓の枠組み（近代公娼制度という）の外にある者たちである。このうち、カフェーの女給については、売春—性行為の提供に限定されない、営業の新規性を表すため、著者は「性風俗産業」との表現も並列して使用している。

近代日本における売買春研究は、本書も指摘する通り、公娼制度を廃止しようとする運動（廃娼運動）を軸に進められてきた。著者はこうした研究動向に対し、その規模においても、公娼制度を動揺させる外的要因としても、社会の需要を反映する存在としても、私娼・性風俗産業は極めて重要な研究対象であるとの立場をとる。私娼・性風俗産業を横断的に分析することにより、これまで扱われてこなかった私娼・性風俗産業の側から、社会の動向と関連しながら展開する売買春史を、東京（一部大阪）を中心に描き出したのが本書である。

私娼・性風俗産業の変化を追うにあたっては、まず第1部において芸妓（第1章）および銘酒屋の酌婦（第2章）の実態検討から入る。両者は、ともに1920年代に盛況となった業種である。

芸妓については、大正期（1910～1920年）に新規の花街が増加するのに伴い、大幅にその数を増やした。この動向の背景には、芸妓人気の影響が指摘される。元来、芸妓は芸を披露するものであるが、これが娼妓との違い——芸妓と客との駆け引き——を意識させるものとなり、芸妓の急増をもたらした。これと並行するように、芸妓の増加は苛烈な競争をひきおこし、「^{みずてん}不見転」（売春営業を行う芸妓）の常態化をまねく。

対して、銘酒屋の酌婦もまた、1916年頃をピークとして浅草十二階下に一大私娼窟を形成し、「「大モテ」と評され」（60頁）るまでの人気をほこった。これは、「効率化が進む大正期の社会のなかで、安価さ、請求の明瞭さ、簡易さを求める人々」（62-63頁）の動向を反映したものである。

しかし、芸妓・酌婦ともに、その人気や営業の隆盛にともない、管理の手が入れられることとなり、その範囲において売春を黙認されるに至る。著者は、これをもって、従来は娼妓のみで構成さ

* 立命館大学文学部授業担当講師・日本学術振興会特別研究員（RPD）

† 東義大学校人文社会科学大学助教授
yurim@deu.ac.kr

れていた公娼制度の周囲には、芸妓・酌婦という「準公娼」が存在し、広義の公娼制度は「準公娼」をも取り込み、膨張していくものであると指摘した。

第2部では、この膨張型の公娼制度のもつ限界に、売買春産業への就業経路——芸娼妓酌婦紹介業の実態（第3章）と、買い手側の意識（第4章）から切り込んでいる。特に、東京の芸娼妓酌婦紹介業の実態を分析した第3章は非常に興味ぶかい内容である。ここでは、「〔紹介〕業者自身も下層社会の一員をなしていた」（123頁）ことに言及すると同時に、芸妓・酌婦への就業がいかに困難なものであったのかが、統計資料から明らかされている。これによると、1920～1935年を通じて娼妓・芸妓・酌婦のいずれも求人数>就業数という状態であり、限られた者しか就業できない状況となっていた。それは、昭和恐慌による「身売り」が大量に発生する時期においても変わらず、むしろ求職者が激増する中であって、就業の困難さはより苛烈になったといえる。これは、就業に際して求職理由などの審査だけでなく、売春営業側が容姿の面においても厳選するという雇用側の行動によるもので、貧困に際しても「身売りできない」人々」（139頁）を生み出した。膨張型の公娼制度をもってしても掬いきれない多くの女性が存在したというところに、構造的問題があると指摘した。

一方、買い手側の視点からみた膨張型の公娼制度については、ジャーナリストであり労働運動家でもある村嶋^{よりゆき}歸之の視点を通して分析される。大阪毎日新聞の記者時代に記者招待会ではじめて一流芸妓を目にした村嶋は、その衝撃以降、芸妓・娼妓へと耽溺していく。しかし、一流芸妓との遊興は非常に高価であり一般青年には到底手が及ばず、「ブルジョアジーや特権階級に独占され」（164頁）という思いを強くさせた。また、娼妓は「性交渉に入る前に何のプロセスも経ない機械的な交渉」（162頁）であったことが大きな幻滅をもたらした。著者は、こうした村嶋の心情を通じて、1920年代の膨張型の公娼制度では、青年層の心理的満足を満たしえない状態となっていたことを指摘している。

最終の第3部は、こうした膨張型の公娼制度のひずみを抱えた状況が、1930年代に入り大きな変化をきたす、その詳細をあつかったものである。ここで取り上げられるのは、カフェの女給がいかに隆盛したか（第5章）と、その営業がそれまでの売買春営業に比して、いかに特異なものであったのか（第6章）という点である。カフェ自体は、大正期からすでに存在したが、エロを掲げた大阪のカフェが東京へ進出し、店舗が増加する中で、女給によるエロサービスはより過激化の道をたどる。さらに、「昭和期の女給が固定給ではなくチップを主な収入源としていたこと」（209頁）も、サービスの過激化を推し進めた。こうして勢力を増したカフェは、客が既存の売買春営業からカフェに流れるという経済的な面、カフェを含む取り締まりの必要性が取りざたされる中で、公娼制度自体に対する廃止論が台頭するという面から、既存の売買春営業を圧迫した。

では、これほどまでに大きな影響を与えたカフェの台頭は、いったい人々のどのような欲求によるものであったのか、それまでの売買春とは何が異なっていたのか、著者は次の点を指摘する。エロを掲げて増加していったカフェであったが、客は必ずしも性行為を要求するのではなく、「一般の男女が出会い、「恋愛」を繰り広げる場所としても機能」（232頁）しており、精神的な満足が求められた。高価で手の届かない芸妓でも、同じく安価・簡便な酌婦でも満たしえない欲求を、カフェが一手に引き受けることとなったのである。さらに、カフェの労働契約もまた、この「恋愛」の要素を強化することにつながっていた。カフェ店主と女給の間に結ばれた契約は芸娼妓酌婦に比して拘束の弱いものであり、前借金を前提とせず、即日契約を解くことも可能であった（自由契約）。

これは裏を返せば、解雇も簡単に行える不安定な雇用であり、就業には経済的な事情も絡んではいたが、表面上、女給は自立した存在ととらえられた。カフェーの隆盛は、「恋愛」と自由契約の2つが社会動向と重なった結果、もたらされたものであったのである。

第3部の最後では、カフェー隆盛の肝となった「恋愛」がその後どのような道をたどるのか、ダンスホールへの規制を題材として戦時下の状況が分析される（第7章）。ダンスホールは、もともとカフェーにも設置されていたが、規制によりカフェーから切り離され、さらには独立して社交ダンスを踊る営業自体が厳しい規制により、閉鎖へと追い込まれる。戦時下の娯楽産業弾圧の中にあっても、特にダンスホールへの規制が厳しく行われたのは、その場を介して「自由恋愛」の思想が、家庭へと持ち込まれることが強く危惧されたからである、というのが著者の分析である。ここにおいては、もはや売買春の問題よりも、「自由恋愛」による家制度の破壊が重大な問題とされて、徹底的な弾圧がおこなわれた。

以上の内容を通じて、本書では売買春営業における大きな転換点を、1930年代のカフェー女給の隆盛に見出した。これは、それまでの大正期に隆盛した芸妓・酌婦では、もはや対応しきれないだけの人々の欲求の変化——「恋愛」への希求・精神的満足——を象徴する。それだけではなく、公娼制度以来、売買春営業が抱えてきた前借金による拘束（人身売買的状況）の解消という面からも大きな転換点であった。こうした本書の指摘は、複数の私娼・性風俗産業の分析・比較を通じて初めて可能となるものであり、売買春研究の新たな可能性を示すものであるといえる。

ただし、次の点についてはより慎重な検討が必要なのではないか。本書の基調である私娼・性風俗産業を横断的に分析するという面では、草間八十雄『女給と売笑婦』（1930年）を用いた娼妓・酌婦・芸妓・女給の就業理由の比較は大変興味深い。著者の分析では、娼妓・酌婦・芸妓は家族を理由とした経済的事由を就業理由にするものが多く、女給になると経済的事由はあるものの家庭的な事情は後景に退くとしている。もちろん、「好奇心」や「カフェー開店のため」といった理由が登場するのは、あらたな状況と言えるかもしれないが、こと家庭的な事情については、慎重な検討を要するのではないか。

そもそも、本書で書かれているように、娼妓・酌婦・芸妓には、規制と引き換えの売春黙認が行われている。対して、女給に対する規制は緒についたばかりの時期にあたる。売買春営業として管理下にあった娼妓・酌婦・芸妓には一定の就業審査が要求されたのに対し、女給の就業は広告・店頭の張り紙をきっかけとするなど簡便であったことも本書の指摘にある。であるならば、前者では就業に際し審査を通りうるだけの説得的理由をあげる必要があり、後者ではその視点は薄いとみることができるのではないだろうか。こうした状況を加味すると、同じく経済的な理由を説明するにあたって、前者ではやむを得ぬ理由を強調するため「家族」の語が付されている可能性はないだろうか。本書の第7章で著者も指摘した通り、国家にとって家制度の存続というのは重要な課題であったはずで、就業審査の際に「家族」の語は十分な重みをもったであろう。対する女給は審査不要であったため、「家族」の語が抜け落ちた可能性も指摘できるのではないだろうか。

加えて、就業理由でもって女給と、他の売買春営業への就業者の意識を切り分けてしまうことも少々気にかかる。すでに本書では、娼妓・酌婦・芸妓の3つの業種では、就業にたどり着くまでの競争の激しさを指摘し、娼妓になれなかった者の受け皿として酌婦などが機能していたことを想定している。こうした、求人・就職状況の厳しさを引くのであれば、女給志願者でも同様の競争と補完の関係を想定し得るのではないだろうか。

こうした点を検討するためには、さらなる史料の必要もあり、必ずしも解明できるとは限らない。しかし、評者があえてこうした指摘をするのは、新規の営業形態が登場したとしても既存のものが淘汰されるのではなく、同時並行して存在するという売買春営業のある種のしたたかさをいかに考えるかという問いのためである。著者の掲げる売買春営業を横断的に検討するという視座においては、複数の営業の単純な比較だけではなく、相互の影響関係や、それぞれの間での女性たちの動きを慎重に読み取っていかなければならない。カフェー台頭へと続く売買春史を提示した著者が、他の売買春営業との同時代的な横の広がりはいかに分析するのか、今後の研究に期待したい。